

王朝文学の研究

今井源衛

角川書店

王朝文学の研究

昭和四十五年十月十日 初版発行

定価三八〇〇円

著者 今井源衛

発行者 角川源義

印刷者 奥村正雄

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三
電話東京(二六五)七一一(大代表)
郵便番号一〇二振替東京一九五二〇八

落丁・乱丁本はお取替え致します

奥村印刷・宮田製本

© Printed in Japan

はしがき

前著『源氏物語の研究』を出版したのは、昭和三十七年であった。以来八年間に、私は専攻とする平安朝文学研究の分野で、幸いにもさらに二、三の本を公にすることができた。しかし、それらの著書に収められなかった論文が若干残った上に、一方、この八年間に新しく方方の雑誌に発表した論文も、追々と数を増してきたので、それらが一定量に達して、そのうちに、おのずから一つの体系らしいものを具える日が来はしないかと、私は何となく当てにする気持であった。一冊の本にまとめたいという希望はあるにはあったが、さりとて急ぐ気はしなかったのである。

ところへ、今度の学園紛争である。米軍機墜落という、厄介なおまけまで背負い込んだ勤務先の九州大学では、たちまちすべての時間をそれに奪われてしまった。長い間研究室を封鎖され、また講義の準備すらも満足にできない状態に追いこまれてみると、時間をかけて論文を書き続け、その後で体系的に一冊の書物をまとめるというような日はたして何年先に訪れることやら、皆目見当がつかなくなってしまった。しかたがない、今の段階でひとまず形をつけておいて、後日また、という気持が強くなるままに、中村幸彦教授の御幹旋の下に角川書店の御好意に甘えたというのが本書の誕生の経緯である。

本書の内容は、平安初期から源氏物語までの物語の研究を中心としている。「物語の様式」には総論を兼ねさせており、以下の「天曆以前」「枕草子とその時代」「紫式部と源氏物語」の各篇は、時代順に配列したものが、その間の史的な脈絡は部分的には認められようが、全体としては意図しているわけではない。各論の問題の立て方や追求のしかたも多種多様である。ただ、おおむねのところは、実証を旨としたただけは言えようか。実証はいくらまでもなく、広く学問の根底であらう。とはいっても、それを狭く文献万能と同義とは考えたくないし、そういう角

度からみれば、やや筋違いの評論的鑑賞的な記述も含まれている。私はそれはそれで楽しかったのである。

しかし、それらの中でも、本書の中心といえはいるものは「紫式部と源氏物語」篇であろう。そこに収めた八篇とつぎの資料篇に収めたものの中の源氏物語関係二篇は、『源氏物語の研究』所収論文に続くものであり、またそれらは、前の小著『紫式部』出版と前後して発表したものが大半で、その脚注的役割を果すものでもある。そしてこれらを将来紫式部の詳しい伝記をまとめる為の予備段階とすることができればいいが、というのが、今の私の気持だ。

最後の「資料」篇は、すべて新資料の紹介と解題である。この中、「源氏のゆふだすき」と「源氏六十三首之歌」は、同時に全文を翻刻紹介したし、山鹿素行筆『枕草子』は、別に「平安文学研究」誌に全文翻刻できたが、天理本『幻中類林』と『大和物語鈔』とは全文未翻刻であり、他の機会を俟ちたいと思っている。

年と共に、私には、文学とは人間そのものという感じがよい切実である。昔から言い古されたそんな素朴な言葉が、今さらのように身に沁みるのは、一つにはやはり学園紛争のせいでもあった。イデオロギーや「正義」のさまざまな旗印と叫び声が喧騒を極める中で、人間はいよいよ退廃し墮落してゆく外はないのではないのか——そんな疑いが深いのだ。そして、学問的方法というものも、それが排他的な「正義」や万能の「真理」面を装い始めた途端に、やはり、人間によって復讐され、足下をさらわれる外はなからう。人間が、「真理」でも「正義」でもなく、ただ人間であるのと同じように、文学や文学研究もまた、文学の奥にある人間そのもののあらゆる側面や可能性を謙虚にじっと見つづけることだけが、新しい発見に連るものではないのか。それが学問的アナーキーに陥込む危険も、自分なりに感じないではないが、その逆の絶対主義よりもむしろそれを良しとするものが、私の心の中に潜んでいるらしいのである。右にいった準備不足の言い訳以上に、この点が、本書の形をいわば無秩序にさせている要因だといわねばなるまい。そして、こうした現状をいかにして克服してゆくかが、これからの私の課題だということももちろん言えるだろう。

収載各論文を改めて読み返すと、今さらのように、長年の間多くの方々から多大の恩恵を蒙ったことを思わない

ではいけない。恩師・先輩・知友・あるいは公私の大学や図書館・文庫の方々などによる温い御指導と御援助とがなければ、どの一ページも書かれ得ないものだ。学問につながる者の有難さをしみじみと感じるのである。

本書の出版をお引き受け下さった角川書店の方々、殊に終始何くれとなく配慮を加えられ、怠惰な筆者を督励された編集部の方、あるいは出版部の堀江利昌氏にはお礼の言葉もない。さらに、校正や索引作成の仕事に力を尽して下さった九州大学大学院の福井迪子・森下純昭の両君にも、心からお礼を申したい。

昭和四十五年六月 梅雨のころ

今井 源 衛

目次

はしがき

一

物語の様式

物語文学論

二

物語構成上の一手法

三

天暦以前

漢文伝の世界

四

在原業平

五

伊勢物語

六

伊勢物語百一段について

七

戒仙について

八

枕草子とその時代

清少納言の生きた時代

二四二

清少納言の美意識と体験

二四八

枕草子の特質

二五五

枕草子の享受

二六四

花山院のこと

二七七

仲文集試論

二八九

紫式部と源氏物語

紫式部の出生年度

三二二

紫式部本名香子説を疑う

三三三

晩年の紫式部

三四七

為信集と源氏物語

三五三

紫式部集の復元とその恋愛歌

三六四

源氏物語と紫式部集

三〇〇

源氏物語の文学史的位置

三六八

源氏物語の享受

三四

資料

「幻中類林」と「光源氏物語本事」

三六

「源氏のゆふだすき」と「源氏六十三首之哥」

三七

古注「大和物語鈔」考

三八

枕草子の古注釈書

三九

論文掲載誌一覧

四〇

索引

四三

物語の様式

物語文学論

一

第二次大戦後今日までの十余年間に於ける日本文学史のさまざまな重要な研究業績の中で、源氏物語を中心とする古代物語文学の研究ほど目ざましい成果が次々と挙げられたものは他にないであろう。その理由はさまざまあるだろうが、最も重要な点は、古代史学の場合と同様に、敗戦によってそれまで自由な研究の重圧となっていた天皇絶対制が崩れ去り、はじめて天皇制を軸とする古代国家の支配関係、あるいはそれを基とする貴族社会の構造など、古代史あるいは古代文学史の重要な基盤が、精細な研究の対象となることができた点にあるといえる。敗戦直後から昭和二十五、六年ころまでに現われた石母田正・西郷信綱・武者小路稷・益田勝実ら各氏の業績は、その基本的な正しさにおいて今日においてもいささかもその価値を失っているものではない。

以上の各氏の主張は、物語文学の歴史的・社会的地盤である平安宮廷貴族社会の下部構造の分析から始まり、焦点をその時代の矛盾を集中的に体験した中流貴族にあって、古代的連帯性を失い個人個人にばらばらとなったその不安な心情生活から、とくに物語文学の荷い手であった彼らの子女の憧憬と批判と陶酔と観察との入りまじった複雑な精神状況まで追いつめてゆくという方法が採られた。そして、たとえば西郷氏の場合には、物語文学の文体である散文がそうした現実に対する客観的・批判的意識を虚構世界を借りて再構成する上に、もっとも適した文体であることが指摘され、ジャンルの問題にまで発展した。

ところがその後、右のような考え方に対して強硬な反対意見が述べられるようになった。その一は折口信夫氏の学統に立つ民俗学の人々である。そこでは、古典を支える共同体的契機が重視され、その生成過程に多数者の参加を想定することによって、右のいわゆる「歴史社会学派」の人々のように、個人の批判意識によって創作の心理や契機を説明することを、誤った近代的類推であるとして斥けようとする。物語文学の構造の骨格の部分に実に多く貴種流離譚やまます物語の型を見出しうることを、物語の展開は現実に対する個人の批判意識では説明し難いような非合理的な古代信仰の要素や筋立てを有していることなどがその理由の主なるものである。そして、最近におけるたとえば池田亀鑑氏の「源氏物語大成」上の文献学的見地からする、源氏物語成立上の数次にわたる複雑な成立事情の推定が、この民俗学的立論を文献学の方から傍証したものだとさえ主張され、今日では、民俗学的発想を無視して物語文学論はなしえないかのような、極端に言えば民俗学ノイローゼが学界に流行しているかの観さえ呈している。またやや似たものに玉上琢弥氏を中心とする考え方がある。すなわち物語は朗読され、絵と共に鑑賞された今日の紙芝居であったために、物語の文章はその面から逆に規制されることが多い通俗文学であったと、物語の享受方法に力点を置く論である。そして玉上氏もまた主として「歴史社会学派」の右のような考え方を、近代的合理主義であると非難している。

しかし、われわれはこのような問題に対してどの様に対処すべきであらうか。

古代貴族における共同体的意識うぬんの問題については、少なくとも平安京という都市貴族が、とくに十世紀以降において他民族間から同族間、さらに血族間に支配権力の獲得をめぐるいかに激しい闘いをくり返したかを見れば、今更、石母田氏の十数年以前の指摘から後退する必要はいささかもあるまい。「骨肉と云ふと雖も用心あるべきか」(小右記)、「鵝眼飛んで母子を分つ」(本朝文粹)などという文字は、有力な証拠であらう。もし共同体的なるものが問題となるとすれば、それは当時の貴族のあきらかな意識表相の問題としてではなく、意識下に埋れた、あるいは習慣的に形式化して長期にわたって継承され続けてきたある種の発想の型の存在ということではあるまいか。それらは、宮廷貴族の意識内容そのものではなく、古代的思想形式の残存と認めるべきものであり、平常はま

ったくその意味や実感が忘れ去られていながら、特殊な場合に、他の現実的な体験に付随して触発され喚び起こされるという様な類のものであろう。そこに物語文学における構想力の第一義的なエネルギー源を認めることは難しい。

しかし、同時に、都市貴族の個人的批判意識というものを、無条件的なものとも考えることも誤りではなからうか。貴族たちの間には階層の変動も絶えず不安も大きかったが、彼らは京都に在るかぎり、貴族であることを止めるわけにはいかなかった。貴族社会はその中に隠れ家や逃げ場所を有しなかったであろう。彼らは同一階級に属することによって、貴族以外の下層者をすべて下賤と呼ぶ特殊の集団であり、いかに相互に争い憎み合うとも、その社会を出ては生きていけなかった。彼らは同種の教養（その内容は今日と比して驚くほど狭い）に養われ、同種の思维形式を身につける。大きな差があるとすれば、階層の相違よりもそれはむしろ男女の性による差違であつた。きびしく相反する利害の対立関係の下にあつては、相互に連带的に生きていくという生活の実感はなかつたであらうが、しかし客観的には彼らは背中合わせのままに縛り合わせられ、莊園収入という同じ根から榮養をとつて生きている。かかる意味の生活の同根性ともいふべきものが、彼らの間を貫き、その意味では、おのがじしの心と矛盾しない思惟や感情の等質性があつたと思われる。

そしてこの事實は、物語文学の創作の条件として重要な意味をもっている。一般に、作者は周囲の現実に対して、自らをまったく異質なものとして設定することはできない。周囲と乖離し時には厭人的な孤独感に陥ることがあつても、しかし自己を客観的に周囲から切離したものとして認めることはできない。相手の人の思惟や感情はこちらによく理解されるように、自分の思考もまた相手に通ずる。もしそうでなければ、相手なり自分なりがエクセントリックなのだ。物語創作の場についていえば、作者の喜怒哀楽は自分の周囲の人々である読者と共通するところが多く、故事や古歌をふんだんに取り入れるような、作者の興味の赴くままの表現も誤解される怖れは少ない。読者が作者を制肘して、平俗な場に引き下す度合いは、現代と比べてはるかに小さい。作者は自らの関心に忠実であることによって読者の関心を惹きつけることができ、読者の関心の在りかを探ることによって、逆に自己の問題を知らされ

することも多からう。それは自己を抛棄して読者に迎合したり、伝統的な話の型に安易に倚りかかって、構想の努力を怠るということではない。むしろそうした周囲の要求や方式の中に自己を投入することが、自己にとっても忠実な方法であるという幸福な一般的状态が物語製作に恵まれていたということなのである。

しかし、あくまで注意したいのは、この場合、そうした方法をとらせるものは、十世紀における都市貴族の一人としての作者個人（必ずしも一人というわけではない）の主體的営為そのものであるということであり、すべての創作過程の中核的地点には、こういう作者の精神の秘密の場所がかくされているであらう。あらゆる外的なもの、あるいはもしそう言いうるならば、共同体的・集团的なものは、この個人の精神の関門を通過してはじめて、文字に移されるほかはなく、たとえ伝承的な話の枠が用いられようと、それは、作者の全体的な構想力の論理によって、秩序づけられ、より高次の作品の世界の一環として奉仕させられるにすぎない。現われた個々の素材はすべて、同時代一般に還元せしめられるかもしれないが、それらを配列し、執筆の進むにしたがって形象に移してゆく作業はもはや特定の個人の精神に属する。それは必ずしも現存の一作品を一人の作家がすべて書き上げたというようなことではなく、その基本的な構想を支える人格の単数性についていっているのである。

たとえば、源氏物語のばあい、光源氏の物語の重要な筋に、貴種流離譚という古代伝承の型が用いられている。

それは、その話の型が当時の一般の人々にとって、もっともなじみのふかい話の型であった為である。ところが、この型による筋書の物語の中心にある明石上の物語の内容をみると、その時代のもっとも現実的な要素に充ちているのであって、この場合、作者の真に書きたいこと——主題的意識は、前者古代伝承ではなく、後者、現実的関心と解すべきであり、そこに、雑多な一般性そのものに形式と内容という形で秩序を与え新しい価値を見出し、これらの統一をはかる個性の存在を認めざるを得ないのである。一般的な伝承の型はそれ自身が自ら作品の中に入り込んで来るのではなく、特定の現実的関心の所有者である作家によって、その表現にふさわしいものとして選ばれるのである。もっともこの場合、「伝承の型」といっても、必ずしも、絶対的な無内容を意味するのではなく、時には形式に留らず、それが内容として元来有した古代的感情の残影ともいふべきものを留めており、その事によ